

## 佐久の先人たち④

### 小学校教員で融和教育の先駆者

# 伴野文太郎

(1869~1934年)



長野県師範学校で校長浅岡一、教諭大江磯吉の感化を受け、郷里で先駆的な「融和教育」をおこない、晩年には県下初の赤十字少年団を結成させた。

### ●県師範学校で名校長に会う

伴野文太郎は、一八六九(明治2)年、佐久郡跡部村(現佐久市跡部)に生まれた。桜井村(現佐久市桜井)の日蓮小学校を終えて二年ほど英語を学んだ。教師は志賀村(現佐久市志賀)出身の神津国助で、慶應義塾を卒業し野沢村(現佐久市野沢)で英学塾(日曜義塾)を開いていた。英語の勉強をすすめたのは小学校長成瀬利貞(旧小諸藩士族)だったとみられる。

や冷笑にたじろがぬ取り組みへのバネはなんだったか。生来の正義感のもとよりだが、師範生のころ身をもって接した、差別に苦しみ耐える教諭大江と「惻隱の情(まごころ)」で彼を遇する校長浅岡の姿が、二重写しで脳裏に強く焼きついていたのはたしかであろう。

文太郎を「奇人」あつかいしない親友はいた。同郷人で師範学校一年先輩の保科百助(五無齋)である。一八九九(明治32)年、上水内郡大豆島尋常高等小学校(現長野市大豆島小)の校長となった保科は、すぐさま被差別部落の分教場をなくして本校へ統合した。更級郡稲荷山尋常高等小学校(現千曲市稲荷山小)校長だった文太郎は、そのとき保科から「部落改善」を相談され、郷里での経験を通じてともに融和教育をすすめた、と回想記の最後に書いている。

この話題にはまだ後日談がある。一九一九(大正8)年、南佐久郡野沢町(現佐久市野沢)に「大正会」が発足した。県下最初の地方改善事業団で、住宅・衛生の改善や各種組合の結成などに取り組んだ。町政首脳の並木輔輔町長と伴野忠一助役は、文太郎に連れられ「出張教授」に加わった教え子であった。かつての痛切な原体験が埋み火となって燃えあがったのである。薫染(よい感化を受けること)や化育(天地自然がすべてのものを造り育てること)といわれるもののあるべき姿がつかえよう。

神津は福澤諭吉の啓蒙精神をうけつぎ、英語だけでなく広く進取・開明的な知識をも文太郎に授けようとした。一八八八(明治21)年、文太郎は、師の教えをうけて、長野県尋常師範学校(現信州大学教育学部)へ進む。同期生には三村安治、矢ヶ崎栄次郎(奇峰)、村松民治郎、小林照三郎など、のちに「信州教育」に名をとどめるような人材が多かった。

こうした逸材を育てたのが名校長とうたわれた浅岡一である。浅岡は、福島二本松藩士として戊辰戦争に加わり、維新後は文部省勤務をへて広島師範学校(現広島大学)教諭となる。一八七四年には、上下議院を開き憲法を定めよという建白書を太政大臣へ提出し、和歌山県勤務などをへて、一八八六年に学務課長と師範学校長をかねて長野県へ赴任した。浅岡の人となりを周知させたのは大江磯吉をめぐる人事である。大江を被差別部落出身と知りながら母校の長野県尋常師範学校訓導に抜擢した。その後推薦入学させた東京の高等師範学校卒業後すぐ長野師範学校教諭に任用した。一八九一年大江が帰任したとき、文太郎は浅岡の処遇に感じ入って、全校生徒



恩師 浅岡 一

### ●勇猛果敢な暴れんぼう教員

一九〇九(明治42)年二月、文太郎は山口県阿武郡明倫尋常高等小学校(現萩市明倫小)の校長に任命された。だが翌年八月には辞めて帰郷している。なぜなのか。筆者が家人から聴き取った伝聞によると、由緒ある同校は士族から転じた教員が多く人事が膠着していた。困った県当局は一計を案じ、人事刷新の大ナタを振るえる「蛮勇校長」を信州から任用しようとした。白羽の矢を立てられた文太郎は、憎まれる「クビ切り役」の大任を果して「逃げ帰った」のだという。

明治末期から文太郎は、知事が坐る信濃教育会長の職の教員への交代を叫びつづけた。一九一七年、上伊那郡中沢尋常小学校(現駒ヶ根市中沢小)校長のとき、信濃教育会の上伊那郡教育会総集会で、郡長を会長からははずすよう緊急提案した。それで休職処分をつけ退職に追い込まれるが、翌年教員の投票で教育会長が実現する。同じ年佐久出身の盟友である佐藤寅太郎が、ついに選挙で信濃教育会長に就く直接の引き金ともなった。

文太郎は「いつでも辞表を懐に入れて」と豪語していたが、復職後もまだ話題をふりまいた。南佐久郡小海尋常高等小学校(現小海町小海小)校長時代、一九二五年に県下初の少年赤十字団(男女生徒一五八人)を結成した、と『信濃毎日新聞』が報

徒学友会で四年生を代表し歓迎の挨拶をのべている。そして大江から教育学や教授法を教わった。だが大江は、内外の差別の厚い壁にはばまれて、二年後に教壇を去らざるをえなくなった。

### ●県下最初の融和教育を実践



明治26年当時の野沢尋常小学校

一八九三(明治26)年、文太郎は南佐久郡野沢高等小学校(現佐久市野沢小)へ赴任した。通勤途上心を痛めたのは、小学校に入れないでいる被差別部落の子供たちの姿だった。入校をかけた尋常小学校長がためらうと、憤激して教え子に黒板や机を地区内の一軒へ運ばせ、毎日放課後「出張教授」をおこなった。翌年さらに校長へ談判して同学を実現させ、同席をいやがる有力町民の子弟はあえて横並びにさせたという。

この先駆的な「融和教育」を文太郎は一九二一(大正10)年に、回想記「想起す二十有七年前」で公表した(「あけぼの資料集」所収)。世間の非難じて話題をよぶ。最後の北佐久郡軽井沢尋常小学校(現軽井沢町中部小)では、市町村立小学校教員の給与の一部を国が負担する「市町村義務教育費国庫負担法」(一九一八年成立)が逆に町村の自立性を失わせる、と怒って一九二七(昭和2)年にきつぱり校長を辞めてしまった。波瀾多い教員人生であった。



伴野文太郎と妻きくぢ  
中沢小学校教員住宅にて(大正4年10月撮影)

(伴野敬一)

### ○参考文献

『あけぼの資料編』増補新訂版

長野県同和教育推進協議会 一九九五

伴野敬一「信州教育史再考」龍鳳書房 二〇〇五

伴野敬一「伴野文太郎小伝」連載

『佐久』第31~38号、二〇〇〇~二〇〇三